

入試狂走曲

秋山 眞兄

<第1楽章>

キララの子どもたちも、この4月でそれぞれ進級した。学年が上がっただけではなく、3月に卒業して小学校・中学校・高等学校に入学した子もいる。希望の学校に入学できた子もいるだろうし、そうではない学校に入学した子もいるだろう。悲喜こもごもあるだろうが、新しい思いを持って学校生活を送ってもらいたい。誰にも可能性が開かれているのだから！

<第2楽章>

ところで、今年の中学入試で新しい事件が起きた。東京の中学入試は2月初めに集中しているが、関西では今年は(毎年かもしれないが)1月中に済んだらしい。関西の超進学校といわれている灘中学の入試に合格した者数10人が東京の進学校を受験するという情報が入ってきた。すでに合格している灘中に進学するのに、なぜわざわざ東京の学校を受験するのか？今までも、あのライブドアのホリエモンや、ソフトバンクのソンなどが卒業した九州の久留米大付属中と東京の学校を掛け持ち受験する、九州の子どもたちがいたが、それは長いこと同じパターンで、東京の各学校はそれなりに読んで対策を講じていた。ところが、考えてもいなかった新手が来るというわけである。幸いなことに私の勤務校ではなく、開成中学を受験した。我が校は試験内容に関して何も対策をとっていなかったが、開成中は対策をとっていて、東京周辺に住んでいないと分かり辛い問題を出題したらしい。しかし、そんなことは何の障害にならなかったようで、かなりの人数が合格点を越え、入学しないと分かっているのに合格者として発表せざるを得なかったようだ。

<第3楽章>

灘中に合格し進学するにもかかわらず、開成中を受験したのは何故か。それは、彼らが通っていた進学塾、しかも老舗ではなく、新しい塾が、その宣伝のために仕組んだのだ。要するに、我が塾では灘中に何人合格、開成中に何人合格という数字が欲しいのだ。そのために、塾きっての「秀才」をホテルに宿泊させ、開成中を受験させ、翌日はデズニーランドで1日遊んで帰す、というわけである。もちろん、その経費は全て塾持ちである。子どもは喜ぶに違いない。しかし、そのような企画(陰謀)に子どもを貸す親は、どんな親なのか！他人の子どもの悲哀など一切関係なく、自分の子どもを楽しませることだけしか考えない親。馬鹿も極まれりである。

<第4楽章>

このような親に、キララの子どもの親はなってほしくない。そう心から願っている。

春の学校でやったこと

レタス定植 * 野草摘み * 野草料理作り * しいたけの植菌 * 麴作り * 味噌作り * 甘酒作り * サンチュの収穫 * テントウムシ探し * 写真立て作り * たまごとり * 牛の世話 * 白州シアター *



いったいこれは何でしょう？ヒントは2コマ右の写真を。



今回のメイン、レタス植え！みんなの力に感動。



加工所では高校生たちが味噌仕込み。



やっぱり土を踏みしめるにははだしが一番。これで思い切り走れます。



春の野に出て野草摘み。蓬につくしにふきのとう。先生は村のヒデコさんとカシコさん。

春の学校報告

2005年3月31日～4月4日

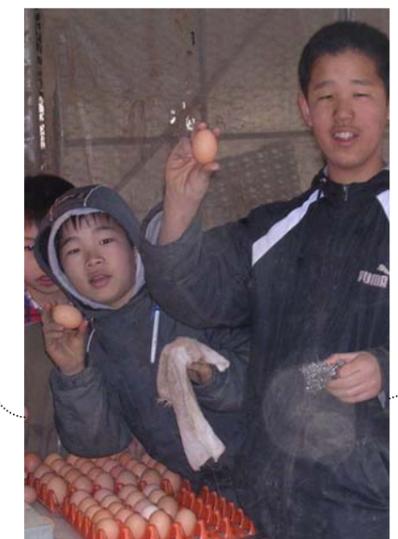
★畑で森で村で、春をたくさん見つけました★



ふんわかサンチュの収穫。ちぎれないように注意！コツが必要なんだなー。



宮川さんに教わりながらしいたけを植えました。収穫が楽しみ！



たまごとりにて。常連の雄大君、余裕の笑顔です。

スタッフ紹介★吉永紘史編★



始めまして、去年の春からキララの学校の仲間になりました吉永紘史です。生まれ育った場所は熊本県水俣市、不知火海の花の町です。だから真っ青な海と真緑な常緑樹林が私の原風景です。

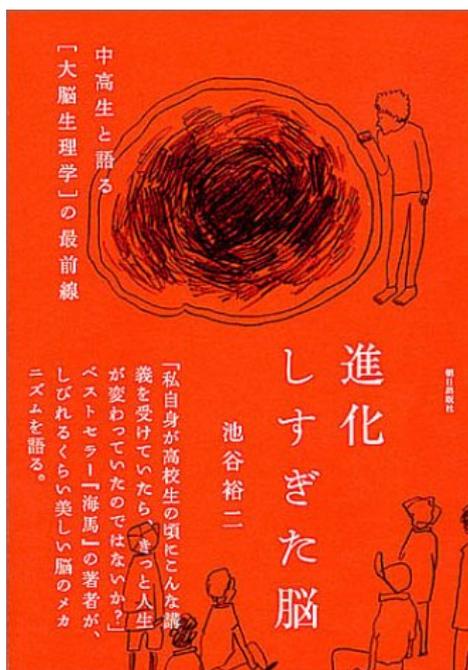
白州に来て最初は“学校”という言葉にとまどいました。でも、心を開いて子供たちと一緒に体を動かせば、いつの間にかみんなの仲間入りです。スタッフなんていわれるのは少し恥ずかしい気がします。だって先頭きって泥だらけになりに行くのはいつも私ですから。

新緑を背に山吹が咲き乱れる春の白州、子供たちの歓喜の声も水しぶきが変わる夏の白州、一日中空を眺めていても飽きる事のない秋の白州、お餅から昇る白い湯気が視界を妨げる冬の白州。私が見た以上のものを子供たちは自然から感じているのでしょうか、教えることより教えられることのほうが多いような気がします。一緒に働き、一緒に遊んで一緒にご飯を食べる。そんなことから教育が始まるのではないだろうかと思最近では考えるのです。

学校が始まるのを指折り数えて待っている、そんな気持ちになった一年目です。ちょっくらフィリピンに行ってきます。真っ黒になって帰ってきて間違えないでくださいね。

キララの本棚

* キララスタッフのお気に入り本・おすすめ本 *



「進化しすぎた脳」

著：池谷裕二

出版：朝日出版社

◆アメリカに住む中高生を対象にした脳の「授業」がまとめられた一冊。著者と中高生との会話がそのまま表現されているのも読みやすさの一つですが、それ以上に、著者自身が対象を“素人”に絞っており、専門的な分野を平易な言葉で表現しているのは「さすが」の一言。脳の構造を、イラストを多用して紹介しているのも好感が持てます。様々な角度から脳を解説する中で、「脳地図は脳が決めるのではなく、身体が決める」という一説には思わず感動。

◆「授業」を受けた中高生が間違った答えをしても、「そういう考え方もある、けどこうは考えられないかな？」と一旦受け止めてから、正しい考え方の道筋を立てているところなどは、これも非常に好印象を持ちました。

◆教育分野においても、このような形式（少人数・車座・対話形式）で行われる「授業」は、今の日本の公教育が抱える問題点やあり方を考える上でも非常に示唆に富む内容となっていると感じます。一方通行ではない「授業」。対話のある「授業」。キララでも活用できる面はあるのではないのでしょうか。（内藤夏）